

令和 7 年度

事業所名 : ホーム とよまね

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393000013		
法人名	株式会社 メイト		
事業所名	ホーム とよまね		
所在地	〒028-1302 岩手県下閉伊郡山田町豊間根第2地割64番地11		
自己評価作成日	令和7年10月20日	評価結果市町村受理日	令和8年1月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念の中にある『高齢者が「生きていること」を実感できる』ということをケア目標としている。それぞれの生活リズムを尊重し利用者が自ら選択し、暮らしていくその人らしい生活を職員が支援している。こども園や、地域のカラオケ愛好会の定期的な訪問がある他、小・中学校の福祉体験学習、また、2か月に1度歌と踊りの公演があり、ホーム利用者だけでなく近隣の方々にも足を運んでもらい地域の楽しみの場ともなっている。コロナ感染予防の為自粛していたが5類に変更になってから再開している。寄付されたタオルを縫い合わせた雑巾、チラシ広告でゴミ箱を作りこども園などに寄付する活動を継続している。交流するだけでなく、利用者にも地域の一員としての役割があり、「生きていること」を実感できる活動として定着することを目指している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設当初からの理念に掲げている「安心と尊厳のある自立生活」の支援を目指し、全職員が毎日の介護を実施している。住民からの野菜の差し入れも多く、事業所での食事はすべて手作り。利用者一人ひとりの誕生日にはケーキや好物も手作りし、利用者、家族からも好評である。こども園や地元中学生との交流を継続しながら、地元神社のお祭り時には虎舞が来訪するなど、継続して続く地域との付き合いの深まりは、コロナ禍前に戻りつつある。洪水浸水想定区域に立地しているため、大雨予想時は早期に避難所に移動する必要がある、その訓練も欠かしていない。過去の避難経験から、避難所の洋式トイレへの一部改修や玄関先のスロープ整備など、着実に改善されてきている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年11月20日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている(参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている(参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	事務所、施設内のホールの目につきやすい所に理念を掲示している。職員会議の際に全職員で理念の唱和をし共有している。また、理念に関する研修会を通じて実践の意識を高めている。	開設時に作成した理念について、年1回は管理者による研修会を開催している。「いつも一緒、いつも笑顔で愛ある介護」をスローガンに毎朝のミーティング時に唱和するとともに、利用者の立場を考えて行動する職員を目指した介護を心がけている。	ケアの本質のレベルを維持していくためにも、職員間での振り返りの機会(研修等)を設け、理念の「尊厳について」考える機会とすることを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	R2.2月～R5.5月までコロナ感染予防の為、ボランティア・こども園・小学校・中学校の交流は自粛していたが6月より少しずつ再開。ホーム内のイベントは行っている。	町内で農業中心の地域であることから、ご近所さんから新鮮な野菜の差し入れがある。地域のこども園のお遊戯会見学のお誘いや地元中学校1年生との交流会、近所の神社のお祭り時の虎舞来訪など、継続して続く地域との付き合いの深まりは、コロナ禍前に戻りつつある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	町の在宅介護をしている方向けの介護教室の見学先となっており、認知症の方の生活を知る機会や認知症の悩みを相談できる場として活用されている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	様々な機関の代表者が推進委員として参加しており情報交換できている。会議を通じて台風などの非常災害時の避難の状況を共有し災害発生時に活かされている。	会議の構成メンバーは、地域住民、こども園、社会福祉協議会、民生委員、近隣施設等幅広く参集し、ご家族にも輪番制で参加を促し出席いただいている。出席者からは、行事で工夫されていること等について評価され、職員の励みとなっている。会議は日頃の利用者の動きがわかるホールで開催されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	運営推進会議や地域ケア会議などで情報交換を行いながら、協力関係の構築に努めている。	運営推進会議に町地域包括支援センター職員が毎回出席いただくとともに、様々なことで担当者情報共有している。事業所は洪水浸水想定区域に立地しているため、大雨予想時は町から早々に避難等に関する情報がもたらされ、安全に避難できている。	

令和 7 年度

事業所名 : ホーム とよまね

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	禁止の対象となる具体的な行為について研修会を行い、理解を深めている。身体拘束排除宣言をしており、拘束のないケア方法に努めている。	同一法人が運営する「とよまね2号館」の職員と合同で3か月に1回開催されている身体拘束廃止委員会に管理者と職員1名が参加している。同メンバーによる研修会にも出席し、職員には復命書を回覧している。職員の発言の中にスピーチロックに似た発言があった場合には、管理者が随時注意する場面もあるとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	研修会を通じ、虐待防止の理解を深めている。また、権利擁護委員会にて虐待につながる不適切なケアが行われていないかチェックしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	虐待防止の研修の中で経済的虐待について学び、権利を擁護するための制度があることを理解している。必要に応じ関係機関に相談している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約時は専門用語を避け説明している。ホームで予想される事故などのリスクや退所の要件などを十分説明し不安の軽減に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	契約時に外部の苦情・相談の窓口の説明をしている。また、運営推進会議へ出席していただきホームの現状を把握したり、意見を言える場を設け運営に反映している。	家族が事業者に来所した際に利用者の様子を伝えているが、家族からは対応に関する要望はあるが、運営に関する意見はない。利用者からも食べ物や出かけたところの希望は話されるが、運営に関するものはなかなか出てこない。	

令和 7 年度

事業所名 : ホーム とよまね

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎月の職員会議で職員の意見や提案を聞く機会を設けている他、日々の申し送りで疑問点や提案を聞き出す機会を設け、運営に反映している。	月1回の職員会議で職員の意見を聞く機会を設けているほか、随時意見等があれば管理者が聞いている。最近では、事業所内の加湿について家庭用の加湿器での効果が期待できないことから、利用者が居室に入る夕方から夜間にかけて、バスタオル等の大きな洗濯物をホール内に干すことで湿度を保つ方法について試行している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	資格や能力に応じた給与体系を整備している。また、会社独自の資格取得支援制度を設け、職員が向上心を持って働ける職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	毎月の職員会議で様々なテーマで研修を実施している他、外部研修の情報提供をし、均等に参加する機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	同じ町内のグループホームとはお互いの運営推進会議に参加し情報交換を行っている。グループホーム協会の定例会、研修会にも参加し、情報交換を行っている。		

Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援

15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	事前調査にて、利用前の生活環境と本人のしたい生活を聞き取り、不安な気持ちを理解するとともに職員が信頼してもらえる関係作りに努めている。		
----	--	---	---	--	--

令和 7 年度

事業所名 : ホーム とよまね

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	事前調査にて本人と家族の関係性や不安な気持ちを理解し、要望を確認して信頼してもらえる関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	事前調査にて生活歴や趣味・嗜好・生活習慣などから必要と考えるサービスについて見極め、提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	洗濯物干し・たたみや掃除、シーツ交換等できる日課について職員が業務として行うのではなく、利用者と一緒に生活支援として、暮らしを共にする者同士の関係を築くようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	面会の際には職員から生活の様子を伝えている。また、家族からもその都度本人の嗜好などを聞き取り、支援に活かしている。健康状態と生活状況について毎月文書で送付し、情報共有している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	利用者の自宅やなじみの場所等行きたい所への外出支援や地域の行事への参加を心がけている。	入居前の近所の友達が訪ねてくるほか、同一法人が運営する「とよまね2号館」を定期的に訪問することで、新しい馴染みが出来ている。地域の神社のお祭りの際には、毎年馴染みの虎舞が来訪してくれ、利用者にとって楽しみの一つとなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者同士の関係性やその時の気持ちを把握し適切な距離感が保てるよう配慮している。一緒にできる季節の飾り作りやおやつ作りなどを共同で行うことで関わり合えるようにしている。		

事業所名 : ホーム とよまね

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	長期入院時や退所の可能性がある場合には、他施設への紹介や情報提供に努めるとともに、退所後も家族がいつでも相談できる体制を整えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の関わりの中で思いや暮らし方の希望を聞き取り、意向の把握に努めている。困難な場合でも、生活歴から本人の思いを代弁し本人本位に検討するよう努めている。	ほとんどの方が意思疎通がとれることから、日々のゲームや会話、入浴時に行きたい場所や食べたいもの等の希望が出され、日頃の介護や行事、献立等に役立っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	本人、家族からの聞き取りなどを通じ生活歴や人間関係の把握に努めている。介護サービスの利用歴がある場合には、担当の介護支援専門員やサービス事業所から情報提供してもらうこともある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	介護記録を通じて一日の過ごし方を把握している。言動や変わったことを記録に残すことで心身状態や有する力等の現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	毎月の職員会議にて介護計画について職員全員で話し合いを行っている。家族の訪問時などに意向の聞き取りを行い計画作成に反映している。目標期間を設定し現状に即した内容に都度変更している。	毎月の職員会議の際、短期目標6ヵ月、長期目標1年の更新前に、日々一人ひとりの計画実践表に記載されたサービス内容等の記録を確認し、職員全員で目標の達成度などについて協議している。本人の希望を確認し、職員の意見を聞きながらプランを作成している。家族にはケアマネが面会時や手紙で説明し、了解を得ている。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : ホーム とよまね

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	観察記録や業務日誌にて情報共有している。記録の書き方の研修を行い、ケアプランに連動した記録を意識し、サービスの実践・結果を記録するように努め計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	ホーム内のサービスに限らず、外出が必要なニーズについては計画に位置付け、サービス提供している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	運営推進会議を通じ、地域のボランティアなどの資源の把握に努めている。近隣の床屋さんの出張カットサービスを活用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	入居前のかかりつけ医や希望する医療機関への受診が継続できるよう同行サービスを実施している。	全員が入居前からのかかりつけ医を受診している。山田町内の受診先が多いが、家族が同行して宮古市内の医療機関を受診する際には、利用者の体調等について主治医宛の手紙を託したうえで受診していただいている。受診先では以前からの知り合いに声をかけられることもある。夜間の急変時には救急車により搬送する場合もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	看護職を配置して。協力医療機関の看護師、かかりつけ医療機関の看護師等に相談し、助言を求めている。		

令和 7 年度

事業所名 : ホーム とよまね

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はホームでの生活を医療機関に情報提供している。退院時は医療機関からの情報提供を書面で受け治療内容や状態の変化について共有している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	契約時に、重度化した場合にグループホームで出来る事を説明している。県立病院の訪問診療縮小化によりの終末期の対応は現在困難であるため、どういう状態になったら退所となるのかを説明している。	重度化した場合の対応について、看取りを行っていないことも含めて本人や家族に入居に先立って説明し、了解をいただいている。看取りについては地域内に協力医師がいないために取り組める環境にないとしている。重度化した場合には、急変時の入院の他、特養や老健施設に住み替えとなる場合が多く、条件が揃った場合には、早期の入所申請などを勧めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	緊急時の対応、事故発生時のマニュアルを作成している。内部研修にて全職員がマニュアルを把握し、初期対応訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	火災については年2回の訓練を実施している。水害についてはマニュアル見直しを行い、避難準備情報が発令された場合は避難することをマニュアルで定め、実際に避難している。年1回水害想定での避難訓練を実施している。	町のハザードマップにおいて、大雨時の洪水浸水想定区域に立地している。現在まで複数回、指定避難場所である豊間根小学校への避難を余儀なくされている。これまでの避難を踏まえて、町では洋式トイレや玄関先のスロープを整備してくれている。事業所では火災想定2回、洪水浸水想定1回の計3回の訓練を実施し、その際には、近隣の協力者2名の協力も得ている。非常時に備えて水、食料等を3日以上備蓄している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	利用者一人ひとりの人格を尊重し、不快にならない言葉かけに努めている。間違いを否定するのではなく受け止め共感する対応に努めている。	事業所の理念である「安心と尊厳ある自立生活」の実践を介護の柱とするケアを行うため、利用者への声かけでは特に「上から目線の話し方」に注意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	過ごしたい場所、食べたい物、したい事をその都度選択できるような声掛けに努め、自己決定できるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	食事時間以外の日課は最小限にし、その日その時間をどう過ごすか利用者が選択している。散歩や買い物も勤務体制で可能な限り対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	外出時は職員と一緒に服を選びおしゃれを楽しんでいる。毎月出張カットがありホーム内で散髪をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	一人ひとりの嗜好を把握し提供している。季節がわかる旬の食材を使ったり、好みの調理法の相談をしたり、盛付を手伝ってもらったり食事を楽しむことができるよう努めている。	近所からの新鮮な野菜の差し入れもあり、その日のメニューは職員が利用者の好みも考えながら季節感を感じる献立を手作りしている。利用者は野菜や果物の皮むきやへたとり、盛り付けなどを積極的に手伝っている。利用者一人ひとりの誕生日には手作りケーキやちらし寿司などでお祝いし家族にも好評である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事量と水分摂取量を記録し、必要量を摂取できているか確認している。嚥下状態に合わせ刻み食などを提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	洗面所へ誘導し歯磨きを行っている。夕食後は義歯を預り毎晩洗浄剤につけ衛生を保つようにしている。介助が必要な方は歯間ブラシなどを使用し口腔衛生に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	排泄記録をもとにパターンを把握し、誘導の必要な利用者の誘導時間の目安として失禁回数の減少に努めている。	排泄チェック表に基づいて随時、声がけ誘導している。利用者の様子を見ながら誘導をすることを原則としているが、職員により対応が異なる場合がある。入居時に家族の都合でおむつを使用していた方もいたが、現在はおむつを使用している利用者はない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	毎日朝食に牛乳を提供している。水分摂取量も参考にし少ない場合は多めに摂取する様促している。主治医の指示により下剤、坐薬の量を調整し排便コントロールしている利用者もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にあった支援をしている。	基本的には週2回の入浴予定表のとおりとしている。希望がないため午前の入浴となっているが、時間や曜日を臨機応変に変更することも可能としている。	週2回の入浴を基本として、一般浴槽による入浴を実施している。入浴中はリラックスし、職員と1対1で自由に話せる時間で良いコミュニケーションの場となっている。異性介助を嫌う方もなく全員が入浴時間を楽しみとしている。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : ホーム とよまね

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	起床、就寝の時間は決めておらず、それぞれのペースに合わせている。食事時間もその日の状態により変更している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	個人ファイルに薬の処方内容を入れている。処方に変更があった場合は日誌に記入し職員間で共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	生活の中での家事を中心に職員の業務を手伝うという感覚ではなく、自らの役割や生きがいとして自主的に出来るよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	散歩などが日課となっている利用者には本人のペースで行えるよう支援している。季節ごとのドライブの企画の他、自宅や親戚の家に行くなど個別に対応している。	客船が宮古港に入港する機会が多く、利用者からの声を聞き、客船の傍まで車ででかけたり、お花見、紅葉狩り等で町内外にドライブしている。散歩を趣味としている利用者とは事業所周辺と一緒に散歩するなど利用者の希望に添った外出支援をしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	能力に応じ管理の仕方を本人、家族と相談して決めている。現在、買い物時はコロナ感染予防のため休止している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	電話の希望があれば、その都度対応している。手紙のやりとりをしている利用者には書き方の支援や投函を職員で行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	季節ごとの飾りを壁に貼っている。天候や気温により照明や冷暖房の使用を工夫している。居室の場所により、日中の光が差す時間帯が異なり寒暖の差が生じることがあるため、各居室に温湿度計を設置し確認している。	ホールの天井は高く、窓も広く暖かな陽射しが差し込んで明るい。エアコンと床暖房で室温が保たれている。壁にはハロウィンやりんごの飾り付けがされ、季節を感じる明るい雰囲気が感じられる。テーブルやソファがあり、利用者はそれぞれの場所でカラオケやゲームで楽しく過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	ソファやホール、居室と本人が希望する所で過ごしている。食事の席は気の合う利用者同士を近くに配置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	自宅で使っていたテレビ、家族写真やタンスなど馴染みの家具を置いて自分の部屋と認識できる環境作りに努めている。	居室には、クローゼット、下駄箱、ベッドが備え付けられている。テレビやタンス、位牌等を持ち込んで自宅にいたような配置で居心地の良い工夫された室内となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	玄関からホール、居室まで段差がなく、廊下には手すりを設置している。移動導線上は歩行に障害とならないように配慮し、安全に自立生活が送れるよう努めている。		